制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

北欧型福祉国家のケアワーク

高橋（たかはし）絵里香（えりか）　千葉大学准教授

冬には一対の青いビニール袋。かつてフィンランドの在宅訪問ケアワーカーにとって、おそろいの道具はこれに限られていた。しかし、最近ケアワーカーの制服が普及した。たしかに、制服はその人の社会的役割を表示してくれるから便利であり、ケアワークの効率化の一環で生じた変化なのだが……。

訪問先でシャワーの介助をおこなうためのスタイル。これも制服の一種？

青いビニール袋の合理性

フィンランドのケアワーカーにとって、袋状の青いビニールこそ冬の制服だ。

それはかならずふたつ一組だ。二〇〇四年の一月、わたしが初めてホームサービス（日本におけるホームヘルプ）の夕方シフトに同行した際にも手渡された。ラフなジーンズにセーター姿のケアワーカーさんが、それを自分が履いている靴にかぶせながら説明してくれた。

「靴を脱いでいる時間がないから、これを使うの」

青いビニール袋は土足で室内に上がり込むための靴カバーだったのである。

冬のフィンランドでは凍りついた道を歩くためにごついスノーブーツを履く人が多いが、編み上げ紐は着脱が面倒だ。しかも、夜間のホームサービスは一軒の滞在時間が約五分と短い。つまり、高齢者宅を訪問するたびに靴を脱ぐことが結構な手間になるのである。

ホームサービスの訪問時間が短いのは、それなりの理由がある。夕方シフトのケアワーカーたちは、独居生活を続けるお年寄りたちに夕方の薬を渡しに行くのだ。

フィンランドでは、多くのお年寄りが独居生活を送っている。社会保障の予算が膨れ上がる昨今、費用のかかる施設介護ではなく在宅介護が施策として推進されているため、自立生活を送るのが難しいような状態にある人びとが、ホームサービスの支えによって何とか独居を続けているのである。

認知症を抱えており、自分で規則正しい服薬ができない人に対しては、ケアワーカーが一日に三回薬を届けることとなる。午前中や午後の訪問はお喋（しゃべ）りの相手をする余裕もあるのだが、夕方シフトは訪問先の数も多く、薬を渡すだけで辞去する場合が多い。

靴カバーは、こうした北欧型福祉国家を支えるケアワークの性質を象徴している。

ケアワーカーの自律性か、労働の効率か

初めてのホームサービス同行から数年が経過し、久々に馴染（なじ）みの自治体を訪れたわたしは、そこで大きな変化を目撃した。靴カバーに加えて、ケアワーカーたちが見慣れぬ制服を着ているのである。色も形もさまざまなトップスの胸元に、スウェーデン語とフィンランド語を公用語とする自治体らしく二言語で「〇〇町ホームケア」と書いてある。

同時期に、町の在宅介護制度は大きな変化を経験した。一番大きいのは、スマートフォンによる労働時間の登録システムが導入されたことだろう。ケアワーカーたちは、お年寄りの家を訪問するたびに玄関先のバーコードをスマートフォンで読みとり、業務内容を事細かに記録することが義務づけられた。

こうした改革はケアワークの効率化を図るという意味では有効だった。過去のサービス履歴をスマートフォンで簡単に確認することができるようになったし、制服によって町のスタッフを視認しやすくなった。だが同時に、ケアワークの規則を増やし、労働内容を形式化していこうとする動きでもある。それは町の社会保障予算を削減していこうとする努力の一環であり、ケアワーカーたちの自律性を制限しようとするものでもあるのだ。

ただし、ケアワーカーたちの制服は色も形もまちまちであり、徹底的な統一化が図られたとは言い難い状態にある。なんでも各人がカタログから気にいったデザインを選んだそうで、ネームタグ以外に統一基準はないらしい。制服を着なくてはいけないというルールもなく、気が向いたときにだけ着ているのだそうだ。

そうしたケアワーカーに許された自由裁量権は、彼らの仕事内容の自律性とも連動しているように思う。ケアワーカーたちは独居するお年寄りたちの生活をもっとも身近な場所で支える存在である。効率だけを信条として成立する仕事ではない。

ケアワーカーたちのてんでばらばらな制服が、これ以上統一されなければ良いな、とわたしはひそかに願っている。

靴カバーをかぶせた筆者の足

ホームサービスの訪問先で、スマートフォンを使ってバーコードを読みとるケアワーカー

色も形もさまざまな制服を着たケアワーカーたち

歩行補助具の助けを借りて、雪の残る道を歩くおばあさん